B 年復活前主日　マルコ15章1―39（33―39）節

［直訳］

33 そして　起って　六番目の時間が、
　闇が　起こった　地の全体の上に
　九番目の時間まで。
34 そして　九番目の時間に
　叫んだ　イエスは　大きな声で、
「エローイ　エローイ　レマ　サバクタニー」
　これは　訳される、
「私の神　私の神、　何のために　あなたは見捨てたか　私を」
35 そして　そばに立っていた者の中のある者たちは　聞いて　言っていた、
「見よ　エリヤを　彼は呼んでいる。」
36 だが走って　ある者が　［そして］　含ませて　海綿に　酢を　付けて　葦に
　飲ませた　彼に　言いながら、
「あなたがたは許せ　私たちは見よう
　来るかどうか　エリヤが　彼を降ろすために。」
37 だがイエスは　大きな声を許して　息を引き取った。
38 そして　神殿の幕が　裂かれた　二つに　上から下まで。
39 だが見て　百人隊長が
　そばに立っていた者が　彼と向かい合って
　次のことを　このように　彼が息を引き取ったのを
　言った、
「ほんとうに　この　人は　神の子で　あった。」

［新共同訳］

33 昼の十二時になると、全地は暗くなり、それが三時まで続いた。34 三時にイエスは大声で叫ばれた。「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。35 そばに居合わせた人々のうちには、これを聞いて、「そら、エリヤを呼んでいる」と言う者がいた。36 ある者が走り寄り、海綿に酸いぶどう酒を含ませて葦の棒に付け、「待て、エリヤが彼を降ろしに来るかどうか、見ていよう」と言いながら、イエスに飲ませようとした。37 しかし、イエスは大声を出して息を引き取られた。38 すると、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂けた。39 百人隊長がイエスの方を向いて、そばに立っていた。そして、イエスがこのように息を引き取られたのを見て、「本当に、この人は神の子だった」と言った。

①文脈

ⓐイエスの逮捕、最高法院の裁判、ペトロの否認

ゲツセマネで祈っていたイエスは、ユダに裏切られ、逮捕される（一四43―50）。大祭司のもとで裁判にかけられたイエスは、不利な証言にも沈黙を守っている。しかし、大祭司が「お前はほむべき方の子、メシアなのか」と問うと、「そうです。あなたたちは、人の子が全能の神の右に座り、天の雲に囲まれて来るのを見る」と答える。この言葉に怒った議員たちはイエスに死刑を決議する（一四53―65）。大祭司の中庭にまで入っていたペトロは、三度にわたってイエスを「知らない」と否む。三度目に否んだとき、再び鶏が鳴くと、ペトロはイエスの言葉を思い出して、泣き出す（一四66―72）。

ⓑピラトの尋問、

夜が明けると、祭司長たちはイエスをピラトに渡す。ピラトは祭りのたびに囚人を一人釈放していた習慣に従い、イエスを釈放しようとする。しかし、祭司長たちに扇動された群衆たちの声に負けて、イエスを十字架につけるために引き渡す（一五1―15）。兵士のあざけりを受けた後、イエスはゴルゴダの丘に引かれて行き、十字架につけられる。通り掛かった人々も、一緒に十字架につけられた強盗もイエスを侮辱する（一五16―32）。

ⓒイエスの死と復活

イエスが十字架の上で息を引き取ると、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂け、百人隊長は「本当に、この人は神の子だった」と言う。このとき、ガリラヤからイエスに従って来た女性たちは遠くから見守っていた（一五33―41）。イエスの遺体は議員のひとりヨセフの願いによって、彼に引き渡され、墓に葬られる（一五42―47）。翌朝、マリアたちが墓に行くと、白い衣の若者が現れ、「イエスは復活した」と告げる（一六1―8）。

②構成

ⓐ第一段落（33―36節）

イエスが十字架上につけられた時刻は、三番目の時刻（午前九時）であったが（一五25）、その三時間後に全地が暗くなり、さらに三時間後に「大きな声」でイエスは叫ぶ。すると「そばに立っていた者」が、イエスはエリヤに助けを求めていると思い、からかう手段を思いつく。「走って」、「含ませて」、「付けて」は、主動詞「飲ませた」よりも前の動作を表し、「言いながら」は同時的な動作を表す。「あなたがたは許せ、私たちは見よう」は、自分の思いつきに酔った者の興奮を表している。「大きな声」「そばに立っていた者」「見る」は第二段落にも現れる。

ⓑ第二段落（37―39節）

イエスは「大きな声」を出して、息を引き取ると、神殿の幕が引き裂かれる。神殿はゴルゴダの丘からは離れており、この幕が神殿内の幕であれば、処刑の場からは見ることはできない。起こったことの単純な描写というよりは、イエスの死の解釈を含む記述である。すると「そばに立っていた」百人隊長はイエスが息を引き取るのを「見て」、「イエスは神の子であった」と言った。

③イエスの叫びと人々の侮辱（33―36節）

ⓐ「六番目の時間（十二時）」は明るい日差しが射してもよい時刻である。このときから始まって、「九番目の時間（午後三時）」まで「地の全体の上に闇が起こった」。全地が闇に包まれる。それ

はイエスを死に陥れようとする闇の勢力が完全に世を支配したことを示すかのようである。この三時間の間、イエスは孤独の直中にいるが、神は沈黙を守り、介入しようとはしない。弟子や民衆に裏切られただけでなく、さらに神にも「見捨てられた」イエスは、大声で「私の神」と呼びかけ、「なぜ、あなたは私を見捨てたのか」と問う。

ⓑ人々はイエスの叫びを聞くと、彼をあざける。エリヤは終わりの日に再来し、困難に直面する正しい人々を助け出すと信じられていた。「そばに立っていた者たち」は、イエスはエリヤに助けを求めて叫んだのだと考え、イエスをからかう手段を思いつく。ある者は「走って」行き、海綿に酢を「含ませて」、葦に「付け」、イエスに飲ませようとして、「私たちは見ようではないか」と言う。これはイエスをもてあそぶ手段を見つけ出した者の誇らしげな提案である。

④イエスの死と百人隊長の告白（37―39 節）

ⓐ人々の嘲笑に対して、イエスは「大きな声」を上げて、息を引き取る。すると神殿の幕が「二つに」、しかも「上から下まで」完全に「裂かれた」（神的受動態）。この「裂く」という動詞は、イエスの受洗の際にも使われている。そこでは、天が「裂かれ」、十字架への道へと踏み出すイエスに、神は「わたしの愛する子」と語りかけている。ここではイエスがその使命を全うしたときに、神は神殿の幕を裂いて、地上へと介入している。

ⓑこの幕は、大祭司が年に一度だけ入ることのできた至聖所とその手前の聖所を仕切る幕である。ヘブライ人への手紙10章20節には「イエスは、垂れ幕、つまり、御自分の肉を通って、新しい生きた道をわたしたちのために開いてくださったのです」とある。イエスの死によって垂れ幕が裂かれ、大祭司だけでなくすべての人が至聖所に入ることが許され、神との新しい交わりが開かれることになった。しかもこの交わりは、ユダヤ人だけでなく、異邦人にも開かれている。39節で異邦人の「百人隊長」がイエスを「神の子」と告白するのはそのしるしである。

ⓒ「イエスは神の子だ」という証言はこれまでもあった（一 1、三 11、五 7）。しかし、1章1節は福音書全体の表題であり、3章11節も5章7節も悪霊による告白である。だが、ここで初めて人間による告白がなされる。しかも「ほんとうに」という副詞が付けられている。イエスが神の子であるという告白は、十字架の死を経た後に、意味のある真実の告白となる。神の子としての真髄は十字架上のイエスに表されるからである。

ⓓこの百人隊長の反応は、35―36節の人々の反応と対照的である。どちらの段落にも「そばに立っていた者」という分詞（35節・39節）と、「見る」という動詞（36・39節）が使われているが、同じ動詞を使うことによって、イエスの十字架をめぐる二つの立場が対比される。一方にとって十字架は嘲笑の対象であり、他方にとっては神の心を読み取るべきしるしである。

ⓔ何がこの違いを引き起こすかといえば、イエスに対して取っている百人隊長の姿勢であるだろう。彼は十字架の「そばに立っていた」だけでなく、イエスと「向かい合って」いる（39節）。十字架のイエスと「向かい合う」なら、イエスを神の子と告白する者となる。イエスをからかう者は「そばに立って」はいても、目をイエスに向けてはいない。そのような者には十字架は嘲笑の対象でしかない。イエスと向かい合い、十字架の死を正視する者には、十字架を通して語りかける神の声が聞こえることになる。イエスの「そばに立って」からかう者となるのか、イエスと向き合ってそばに立ち、「ほんとうにこの人は神の子だ」と告白する者となるのか。十字架はどちらの側につくかを問いかけている。

⑤神に叫び、問いかける

ⓐ34節の「叫んだ」はボアオーという動詞である。この語は「叫ぶ・声を張りあげて呼びかける」が基本的な意味であるが、叫ぶ人のあり方や叫び声の内容によって異なった意味合いを持つ。まず一般的に「叫び声をあげる」を意味し、「喜びの歓声をあげる」や「神からの使信を呼びかける」の意味でも用いられる。

㋐七十人訳では「苦痛の叫び声をあげる・助けを求めて叫ぶ」という用法がよく見られる。この意味は、逃れようのない苦境に立たされて助けを必要としている無力な人間が人間にではなく、神に向けて発する叫びを表す。エジプトで奴隷となったイスラエルは苛酷な労働にうめき「叫ぶ」（出二23、二〇16）。敵の攻撃に耐えかねたイスラエルも、主に助けを求めて「叫ぶ」（士一〇10）。神が救いの業を行わず、沈黙しているがゆえに苦境に陥ってしまった人間が、苦境の底にあっても絶望せずに、神を信頼し、神を呼び求めるときにこの動詞が使われる。

㋑このような叫びは神への祈りであり、神への信仰告白である。新約聖書では、悪霊につかれた子の父親や盲人が、イエスにいやしを求めて「叫ぶ」（ルカ九28、一八38）。また選ばれた人々は神に祈り求めるために「叫ぶ」（ルカ一八7）。十字架のイエスの叫びもこの意味での叫びである。はりつけにされたイエスが神に向かって「叫ぶ」（34節）。イエスは「私の神、私の神」と繰り返しているが、十字架にはりつけられても、イエスにとって神は「私の」神なのである。

ⓑイエスの叫びは、詩編22編の冒頭句である。この冒頭句は絶望を訴えているように見えるが、イエスはなぜこの句を十字架上で唱えたのだろうか。詩編22編は嘆きに始まり賛美に終わるので、イエスは神を賛美するために、この詩編の冒頭句を口にしたと説明することがある。しかし、聖書の嘆きは絶望ではない。それを教えるのは、エレミヤ12章である。

正しいのは、主よ、あなたです。
それでも、わたしはあなたと争い
裁きについて論じたい。
なぜ、神に逆らう者の道は栄え
欺く者は皆、安穏に過ごしているのですか。

神に逆らう者が栄えるのは理不尽である。エレミヤもこの現実を不可解だと思っている。このように、信仰と現実とが対立するとき、信仰を捨てて、現実をとることもできるし、逆に現実から目を背けて、信仰の世界に閉じこもることもできる。しかし、エレミヤはどちらの道も選ばない。信仰と現実の矛盾に身をおいて、不安と戸惑いに耐え、神に「なぜか」と問いかける。イエスの「なぜ」も同じである。沈黙する神に「私の神」と呼びかけるイエスは、なぜと問いながら、沈黙の底にあるはずの神の声が聞こえるのを待つ。この叫びはもはや絶望ではなく、神の応答を求める祈りなのである。

ⓒ弟子たちは去り、たった一人、十字架にはりつけにされたイエスは恐ろしいほどの孤独の中にある。しかし、イエスはその死の苦しみの意味を聞かせてほしいと神に叫ぶことができる。「私の神よ、なぜ」と祈り求めるとき、イエスは確かに神へと目を上げている。この時、イエスはひとりではなく、問いかける相手（神）と共にいる。だからこそイエスは最期まで神に聞き従った「神の子」である。「ほんとうに、この人は神の子だった」という告白は、苦しむイエスを見つめ、イエスの言葉に耳を傾ける者だけが語ることのできる言葉である。